

一八八五年八月十六日(日)

聖ラーマクリシユナ、ギリシユ、シャシャダルたちと共に

タクルの病氣のことがカルカッタの信者たちに知れわたった。しかし、喉のどの具合がお悪いそうだと、という程度であった。

一八八五年八月十六日の日曜日。バッドロ月一日。大勢の信者たちがタクルにお目にかかりに来た。——ギリシユ、ラーム、ニティヤゴパール、マヒマー・チャクラバルティ、キシヨリー(・グプタ)、学者パンディットシャシャダル・タルカチューダーマニ等々。

タクルは、以前のように喜びに満ちて信者たちと話しておられる。

聖ラーマクリシユナ「病氣のことを、マーに言えないんだよ。何だか恥ずかしくてさ」

ギリシユ「私のナーラーヤナ大神がよくして下さいますよ」

ラーム「よくなりますとも——」

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハッハ、そうかい。じゃ、祝福しておくれ」(一同大笑)

ギリシユは最近ここに来るようになったのだが、タクルは彼にこうおっしゃる。——「お前はたくさん仕事があつて、いつもゴタゴタのなかで暮らしているね。あと三回、ここにおいで——」

そして、シャシャダルと話をなさった。

〔学者^{パンデイット}シャシャダルへの教え——ブラフマンとアディヤシャクテイは不^{おなじ}異〕

聖ラーマクリシユナ「(シャシャダルに)——あんた、アディヤシャクテイの話を何かしておくれよ」
 シャシャダル「私は何も存じません」

聖ラーマクリシユナ「ハハハ……。Aなる人がBなる人を大そう尊敬していた。あるときBがAに、タバコの火をもってきてくれ、と頼んだ。するとAは、『私に、あなたのタバコの火を持ってくる資格^{ねうち}があるでしょうか?』と言って、とうとう持ってきてくれなかった!」(一同笑う)

シャシャダル「では……。あの御方が(宇宙の)動力因であり質量因であります。あの御方が生物や世界を創造なさるのであり、又、あの御方自身がその生物、世界になっておられるのであります。たとえて申すなら、クモがアミを張る(動力因)。しかも、その糸は自分の体の中から吐き出すように(質量因)——。

聖ラーマクリシユナ「それから、もつとあるよ。精神^{ブルシヤ}である御方が物質^{ブラクリテイ}であり、ブラフマンである御方がシャクテイなんだ。静止していて、創造、維持、破壊の活動をしないと、あの御方をブラフマンといい、ブルシヤという。活動するとき、あの御方をシャクテイといい、ブラクリテイという。けれども、ブラフマンであるところの御方がシャクテイであり、ブルシヤである御方がブラクリテイになっていなさるんだ。水は静かなときも水だし、動いて波立っていても水だ。蛇はうねって歩いて

いても蛇、ジツとしてトグロをまいていても蛇だ」

〔聖ラーマクリシユナ、ブラフマンの説明の最中に三昧に入る——苦楽とカルマ〕

「ブラフマンのことは口で説明なんかできっこない。無言になってしまふ！ 私のニタイはマタハティ(氣狂い象のように踊る)！ 私のニタイはマタハティ！ と歌いながら、しまいに口がきけないようになって、ただ、ハティ！ ハティ(象)！ その次は、ハティ！とも言えなくなつて、ハ！ ハ！ 最後にそれさえ言えなくなる！ 外部そとの意識がなくなるんだよ」

こうおっしゃるうちに、タクールは三昧に入られた！ 立つたままの入三昧だ。

三昧が解けてから少したつて、こうおっしゃつた——「クシャラ(変化)とアクシャラ(不変)の向こうに何かがあるか、口では言えない」

皆、黙然としていた。するとタクールが、又おっしゃつた。——「苦楽の経験が残っている間は——カルマの残りがあるうちは、三昧には入れない。(原典註)

(シャシャダルに向かつて)——いま神さまは、あなたに仕事をさせていなさる——講演や何かをね。だからあなたは、今はそういうことを一生懸命しなけりゃいけない。

するべき事をし終えたら、もうないよ。主婦が家の仕事を全部しおわつて水浴びに行くときは、後ろからいくら呼んでも振り向かない」

第19章 病気の聖ラーマクリシュナ

(原典註) ボーガイシユヴァリヤ・ブラサクターナン タヤーバフリタ・チエータサーム
ヴァヴァサーヤートミカー ブッデイヒ サマーダウ ナヴィディーヤテー

『感覚の快樂たはらと権力に執着し その追求に右往左往する人々の心には
真理かみを愛し それに仕えようという 決断がが起こることはないのだ』

—— ギーター 2・44 ——